

短編映画シナリオ

タイトル 泡沫の夢

登場人物 日向…主人公。文芸部の部員の一年生

林藤…ヒロイン。同じく文芸部の部員の三年生

マーク説明 N…ナレーション

…表情や仕草の説明

○…カメラやシーンの説明

林藤 「そういえばなんで日向くんは私を海に誘ったの？」

・階段に座って日向に訊ねる。不思議そうに

日向 「少し前に海に行きたいって話していたのを聞いたので」

・目の前に広がる海を見ながら(?)

林藤 「ちなみにここでウエイクボードってできる？ 船に引っ張られながらボートに乗るやつ」

・手に何かを持つてるような動作をする

日向 「それは無理ですよ。やるなら事前に許可がいきます」

・笑いを堪えるように

林藤 「ええー、海だからできると思ったのになあ」

・不貞腐れながら。残念そうに脚を伸ばし、後ろに寄り掛かる

日向 「でも」

・立ち上がりながら靴と靴下を脱ぎ、波打ち際で立ち止まる

日向 「水の掛け合いくらいならできますよ」

・林藤に向かって水をかける仕草をする

林藤 「それ早く言ってよ」

・一瞬固まるが、日向の言葉を聞いて嬉しそうに笑う

林藤 「ねえ、これ日向くん押し倒したらどうなるかな」

・水をかけながら日向に訊く。少し離れていても聞こえるような声で

日向 「そりゃあ、濡れますよ」

・水をかけ合いながら

林藤 「あはは、だよね。海に押し倒してもいい？」

・企むような感じで。楽しそうに

○掬った水を戻して押し倒す仕草をする

日向 「嫌ですよ。濡れるじゃないですか」

・苦笑い

○苦笑いなのは制服を濡らしたくないから

林藤 「浅いから大丈夫だよ」

日向
・水をかけながら楽しそうに笑う
「いや、そういう問題じゃなくてですね」

日向
・少し呆れた(?)ように
○林藤に水をかけようと再び海面に手を伸ばす
「海ってそういうものでしょ」

林藤
・目の前にいる日向にだけ聞こえるような小さな声で。
企むような笑みを浮かべる

林藤
○海面に手を伸ばした日向の左手首を掴んで、日向を引き寄せる。
驚いている日向の目を真っ直ぐ見つめたままセリフを言い、
日向の肩を両手で押して海へ押し倒す

林藤
「あはは。日向くんって意外とどんくさいんだね」
・楽しそうに笑う

日向
○日向は浅瀬に尻もちをついている状態。後ろに手をついている
「急にやめてくださいよ。押し倒していいなんて僕一言も言ってないですけど」
・想定外のことをされた子どもが驚くような感じ。怒ってはいない
*言動が合っていないので変わるかも

林藤
「ごめん、ごめん。でもいざれ乾くからいいじゃん」
・尻もちついている日向を見ながら
「でもこういうのって楽しいよね」

日向
・日向に手を差し伸べながら
「僕は全然楽しくないです」
・差し伸べられた林藤の手を取りながら立ち上がる
林藤
「日向くんも楽しそうに笑ってたよ」
・笑みを浮かべて

林藤
○日向は無言で顔を背ける
「ほら、あそこで休もう」

林藤
・鞆や靴を置いたところを指差し、歩き出す。日向もそれに続く
「日向くんは将来なりたいたいものってある？」
・日向の顔を覗き込みながら聞く。優しく訊ねるように

○一時の間をおいて話し掛ける。話さない間はふたりの姿を映す

日向 「どうしたんですか、急に」

・困ったような顔をする

林藤 「んー、まあなんか気になってさ」

・曖昧な感じ。含みを持たせて

林藤 「で、どうなの？」

・顔を覗き込みながら興味を示すように

日向 「……まだ分からないです」

・申し訳なさそうに俯く

林藤 「そうだよ。私も入学当初はそんな感じだった」

・水平線を眺めながら微笑む

林藤 「私ね、臨床心理士になりたいんだ」

・視線は変わらず水平線を見つめたまま足を伸ばす

○大切なことを打ち明けているので、静かな雰囲気が理想

日向 「……なんですか、臨床心理士って」

・馴染みのない言葉に難しい顔をする

林藤 「まあ、少し違うけど身近な言葉で言うと心理カウンセラーみたいなものかな」

・微笑みながらアドバイスする。隣に居る日向を見ながら言う

林藤 「中学生の頃にお世話になったカウンセラーの先生が居ただけど、その人にずっと憧れてたの」

・海を眺めながら懐かしそうに

○「仮に臨床心理士に」まで海を眺めながら呟いてる

林藤 「仕事だから当たり前なんだけど、私が悩みを相談しても嫌な顔ひとつせず話を聞いてくれたり、アドバイスしてくれたりしてくれたことが本当に嬉しくて」

・懐かしそうに微笑む

林藤 「救われたって言っても過言じゃないくらいなんだけど」

・同じく懐かしく微笑む。照れ笑い

林藤 「なれるのかなって最近考えてて」

・不安そうに

林藤 「仮に臨床心理士になれたとしても私自身がその人を救うことが出来る保証はどこにもなくて、それなら違う仕事に就いた方がいいんじゃないのかなって思ってた」
・笑いながらもどこか不安そう

林藤 「仮に臨床心理士になれたとしても私自身がその人を救うことが出来る保証はどこにもなくて、それなら違う仕事に就いた方がいいんじゃないのかなって思ってた」

・少し目を細めながら海を眺める

林藤 「なんかごめんね、変な話しちゃって」

・申し訳なさそうに笑う

日向 「……先輩が書いた『泡沫』っていう詩、よかったですよ」

・優しく呟く。照れるように正面を向きながら

林藤 「……日向くん、あれ読んだの？」

・突然の告白に驚く。体を更に向ける

日向 「それはまあ、文芸部の一員として」

・恥ずかしそうに顔を逸らしながら

日向 「僕は『泡沫』を読んで救われましたよ」

・ゆっくり首を戻して間を開ける。正面を向きながら言う

日向 「僕がああ詩を書いたとしても泡沫なんてタイトルを思い付かないですし、どの詩を切り取ってもちゃんと情景が思い浮かびますし」

・海を眺めながら呟く

日向 「詩が綺麗な人って心も綺麗だと思っんです」

・林藤の顔を見ながら

林藤 「そうかな」

・不安そうに

日向 「だから、その……なんて言うんですかね。正直懂れますよ。どんなふうに世界を見ていたらそう感じるんだろうって」

・俯きながら少し悔しそうに。自分の手を見ながら呟く

林藤 「……なら、やってみる？」

・顔を覗き込みながら優しく訊ねる

日向 「……やるって何をですか？」

・突然の提案に混乱する

林藤 「私が書いた『泡沫』を二人で再現するの」

・浜辺まで移動して、振り返って両手を広げる

日向 「でも、どうやって」

・目を泳がせながら少し不安そうに

林藤 「私が指示するから、日向くんはそれに合わせて動いてくれればいいよ」

・意地悪そうに

林藤 「そうしたら、少しだけでも私が見ている世界が見えるでしょ？」

・顔を覗き込んで笑顔

日向 「」

林藤 「ほら、早く早く」

・手を招く

日向 「……分かりましたよ」

林藤 「日向くんは青空の下で海を眺めていて、イヤホンを私と分け合っているの」

・話しながらイヤホンを取り出し、分け合う。五秒くらい二人が海を眺めている姿を映す

林藤 「……どうだった？」

・イヤホンを外しながら訊ねる

日向 「……なんか、綺麗ですねやっぱり」

・羨ましいという感情を持ちながら、少し諦めたような感じ

林藤 「やっぱり？」

・不思議そうな顔で振り返る

日向 「僕、ずっと先輩の詩を読んだ時から綺麗な詩を書くなあって思ってたんです。触れたら消えてしまいそうな、それこそ泡沫みたいな」

・声は小さいけど、林藤に届くくらいの優しい声で。

目は海を見たり林藤を見たりしてる？

日向 「そんな綺麗な詩を書く人が人を救う仕事に就かないなんて勿体ないと思うんです。後輩が何言ってるんだって感じですけど」

・頭を掻きながら恥ずかしそうに

○林藤は微笑む

林藤 「ねえ、日向くん」

・呼びかけながら立ち上がる

○日向は黙って林藤を見上げる

林藤 「もう少しだけ遊ぼうよ」

・優しく笑って日向の手を引っ張って海辺で水をかけ合う

N 一瞬だけ繋がったあの白いイヤホンに、彼女は何を思っただろう。僕と同じ感情を抱いていて欲しいというのは、少しでも僕儘かもしれない。でも確かにあの時彼女と見た海は絵に描いたような青で。イヤホンを受け取った彼女の指先は少しだけ冷たくて。微笑んだ彼女は太陽みたいに温かくて。それらすべてが綺麗だった。思いつくようになるにはあまりにも彩度が高すぎて、まるで夢なんじゃないかと錯覚するくらいに。

日向 「林藤先輩」

・遊び終わり、荷物を取りに行こうとしている林藤に話し掛ける。林藤は立ち

止まって振り返る

「きつと臨床心理士になれますよ。先輩なら大丈夫です」

・まっすぐ目を見つめながら語り掛けるような感じ

林藤 「ありがとう」

・振り返ったまま一瞬驚いて優しく微笑む。嬉しそうに

N 世界に二人しか居ないような空間で、僕は今までで一番綺麗な青を見た。その青を覚えている限り、僕らは何者だつてなれるはずだ。詩で僕を救った彼女は、きつと臨床心理士の夢を叶えられる。僕を救ったように、彼女は目の前に居る誰かにもきつと手を差し伸べてあげられると、僕はそう、信じている。

*曲を流すのが大丈夫なら一つ目のナレーションのところ(予定)で流したい。

*最後の「僕はそう、信じている」の「信じている」の部分で画面を真っ暗にして声だけを流したいとも考えています。そのあとにエンドロールが流れる予定。

泡沫

君は私の隣を歩いている
綺麗って呟いて君は群青色と茜色が残る空を見上げる
その横顔が儂かった

君は微笑む

この曲聴いてみる？と言ってイヤホンから溢れ出ていた
その音が愛おしかった

君は立ち止まる

泣かないでよと言って涙を拭ってくれた君の指先
思わず両手で握りたくなるほど冷たかった

君は見つめる

いつか見せたいものがあるんだと言った
その瞳は輝いていた